

（１）確かな学力

「１．基礎的な学力が身につけている」については、教職員は「よくできている」「大体できている」の合計で 95% の数字を示している。教職員の意識では基礎学力がついていると判断しているが、生徒自身が授業の中で「わかる」と実感している総数は、全体で 77% であり教師の認識との差がある。生徒が「わかる」と実感できる授業の展開を再考する必要があると考えられる。

「２．授業の中で満足感や達成感を持っている」についても同様の結果が現れている。教職員が「満足感や達成感を味わっている」と判断していても 23% の生徒が「満足感や達成感を持っていない」ことを踏まえ、「わかる＝できた」と感じられる生徒の立場に立った「確かな学力」を高める授業展開を目指すべきである。また、上記の項目については学年が上がるほど「よく出来ている」「出来ている」の肯定的な回答が下降していくことも課題として共通理解する必要がある。

「３．先生は学習の効果を上げるために工夫・努力している」については 1 年生で、7 月調査より 5% 上昇し、95% 近くが肯定的に答えていることは指導者の努力・工夫が生徒にも伝わっていると考ええる。

7 月調査では 3 年生の肯定的な評価の合計が 73% だったものが、86% に大幅に上昇している。これは教師の指導法が改善されたと捉えられるが、進路決定の時期に入った 3 年生が積極的に学習に取り組み、授業内容や課題を克服しようとする前向きな姿勢が数字となって現れたものと考えられるべきであろう。この点においても学習は生徒と教師の共同の営みの産物であると踏まえて生徒の立場に立った学習を支えていくことを再確認すべきである。

「４．家庭学習の習慣」についても 7 月調査との比較で 3 年生の肯定的な答えが 46% から 61% に大幅に上昇している。部活動を引退し自身の進路実現のために 3 年生徒が学ぶ主体性を身につけた好結果であると判断できる。

（２）豊かな心・健やかな体

「１．進んで挨拶をしている」については生徒全体で 94% を超える生徒が「よく出来ている・大体出来ている」と答えているが、それに反して教職員は 64% が肯定的に答えているに留まっている。生徒と教職員の意識に大きなずれが起こっている。生徒は「出来ている」と感じていても教職員は「もっと出来る」と考えている。

「２．きちんとした言葉遣いをしている」についても上記の「挨拶」と同様の傾向を示しており、生徒全体で 95% の生徒は「きちんとした言葉を使っている」と思っているが、教職員から見ると 47% しか「きちんとした言葉を使っている」と判断していない。

上記の 2 項目の生徒と教師の意識の差は明確に存在しているものの、いかにすれば社会的にも「きちんとした挨拶や言葉使い」を身につけられるかを常に生徒に実践させられるかを、われわれ教師だけではなく、家庭・地域と連携して取り組まなければいけない事柄と言える。

「３．学校の決まりや約束事を守っている」という項目については 1 年生 93%、2 年生 98%、3 年生 100% の好結果を示している。学年が上がるごとに決まりや、約束が守れることが実感として身につについていった成果と言える。中でも 3 年生が 100% の回答を示したことはよろこぶべきことである。今年度も校内外の問題行動が少ない現状であるが、そのことに甘んじることなく、「（１）確かな学力」で顕著になった課題に目をむけ、指導の方向性を確認することを忘れてはならない。

「4. 他人を思いやり、親切にしている」についても「3. 学校の決まりや約束事を守っている」と同様の好結果を示している。90%以上の生徒・保護者・教職員が「よく出来ている」「大体出来ている」と答えている。本校で進めている道德教育の推進が実りつつあると実感できる。今後、生徒指導の側面のみならず「心の教育」の中心である道德教育を教科の時間だけでなく、あらゆる教育活動の中で、さらに「心の教育」を進めていくことが本校教育の基本方針であると再確認する必要がある。

「5. 楽しく学校に通っている」では1年生で98%、2年生で94%、3年生で97%が「楽しく通っている」と答えている。7月調査との比較で、全ての学年で4～14%上昇している。このことは1年間の学校生活の中で、達成感や満足感を学級、広くは学校生活の中で生徒自身が感じ取っていることになる。特に3年生で7月調査では83%であった良好な回答が、12月調査では97%にまで高まっている。良好な人間関係や、学級集団への帰属意識が高まったものと考えられる。ぜひこの良好な結果が今後も維持できるよう教職員が今後「生徒のための学校づくり」をさらに推進しなければならない。また、教職員にとって励みにもなった事項である。

（3）学校・地域について

「1. 先生に気軽に質問・相談しやすいと思いますか」の項目では、全学年85%を越える生徒が「話しやすい」「まあまあ話しやすい」と肯定的に答えている。8割以上の生徒が肯定的に答えていることは生徒と教職員の関係が、概ね良好と言える。日常の学校生活の中で教職員に積極的に質問・相談してくる生徒は比較的到自己肯定感が高く自己有用感を持っている生徒であると思われる。1年生において7月調査では80%の生徒が肯定的に捕らえていたが、12月調査では90%にまで上昇している。入学後、12月までの間に、学年教師を中心とした生徒指導・教育相談体制が生徒の「困り・躓き」を解決の方向へ向かわせつつある大きな成果である。

しかし、全ての学年に10～17%の生徒が否定的に答えている生徒が存在していることに注目し、京都市の「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」という教育理念を忘れず、個々の教職員の研鑽と学年・学校の組織力の向上を目指す。

「2. 学校行事に積極的に参加している」と「3. 地域行事に積極的に参加している」を比較すると、やはり「地域行事に積極的に参加している」がすべての学年で下回っている。中学年代は部活動の参加が「地域行事への参加」の大きなマイナス要因と考えられるが、避けることの出来ない側面である。ただ、大原野中学校学区の地域行事はとても活発で行事回数も多く、参加人数や地域行事の内容も充実している。一方、3年生で「地域行事への参加」が大きく減少しているのが残念である。

「4. 学校・学級だより、学校HPで学校の様子が伝わってくる」の項目では、91%の保護者から肯定的な回答を頂いている。学校・学級だよりやHPでの情報の発信は、生徒への情報発信のみならず、保護者・地域に学校の取り組みや教育活動への理解と相互の信頼を深めるために必要不可欠である。今年度、小中一貫教育の推進を目指して、校区小学校・中学校の総称を「大原野学園」とした。「大原野学園」の総称がPTAの活動、地域の活動にも、思いのほか早く浸透した理由は、学校だよりやHPはもちろん、「大原野学園通信」の地域全戸への配布が功を奏した結果である。今後も、学校から保護者・地域への情報発信を続けていくことは、保護者・地域・学校がさらに一体となって学校教育を進めていくために必要不可欠である。